

タイトル: 令和 7(2025)年度 研究セミナー(第 26 回)

日程: 2025 年 12 月 19 日(金)-21 日(日)

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディア会議室(304)

「2024 年以降のヨルダンにおけるシリア難民の帰還をめぐる意思決定の様相」

中西 萌(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

本セミナーを知ったのは、2020 年度の中東★イスラーム教育セミナーにオンラインで参加したことがきっかけでした。当時、学外の先生方や受講生の研究に触れ、中東・イスラーム研究の幅広さを実感するとともに、コロナ禍の開催であった為に、いつか対面で参加したいと感じていました。今回、発表の機会をいただき、先生方からご助言を頂戴できただけでなく、当時の受講生の方とも 5 年越しに対面で再会できたことを大変嬉しく思います。

私は、シリア難民の起業家、生計実践者、そのご家族を対象に、彼らの主体的営為の実態に着目することで、受け手とされがちな難民の経済的潜在性を明らかにしたく、調査を続けてきました。博士論文執筆に向けたヨルダンでの現地フィールド調査も半分以上を終え、長期にわたり調査地に身を置くなかで、自身の研究に一度距離を置いて捉え直し、不足点について客観的な助言を得たいとの思いから、本参加を楽しみにしておりました。調査の不足データばかりを気にしていましたが、先生方から頂いたコメントは、すべてのデータを逐一書くのではなく、最も示唆的な事例を選び、深く掘り下げるべきであるといった旨のもので、目から鱗でした。フィールド先にいると、2024 年 12 月 8 日のシリア政権交代をはじめとする激変の出来事や、調査協力者の半生にわたる壮絶な語り、さらにガザやレバノン情勢、イラン・イスラエルの戦争など、目まぐるしく変化する中東地域の状況に日常的に直面することで、いずれも研究には重要な要素と感じてしまいがちです。その結果、多方面にトピックが散らばり、まとまりの無い内容となっていた事が、返って自身の研究を薄くしていました。「研究は救急車を追ってはいけない。」というコメントを受け、今後は得られた調査結果の中から特異性を絞り、どの語りに主軸を据えて論じるのか、一本のストーリーとして論文に構築していく必要性を痛感しました。増やすのではなく、削って際立たせることの重要性を気付かされ、作成した博論の章立て案も、改めて練り直す必要があると感じました。

本セミナーは、発表時間 1 時間、質疑応答 1 時間という、大変手厚い構成でした。博論執筆を志し、試行錯誤を重ねる博士課程の学生にとって、当該分野を牽引する第一線の研究者の方々に腰を据えて耳を傾けて、そしてご助言いただける本セミナーは、またとない貴重な機会でした。分野の異なる受講生との意見交換もでき、大変学びになりました。一点のみ、今後に向けた要望を申し上げるとすれば、先生方を含む受講生のご連絡先を一覧にしてご共有いただけますと、本セミナーを契機とした今後につながり、大変ありがたく存じます。

本セミナーにて 3 日間にわたるプログラムを設けて頂き、AA 研の先生方、事務局の皆さま、誠にありがとうございました。